戦後日独関係史

工藤 章／田嶋信雄――［編］

東京大学出版会

戦後日独関係史

工藤 章／田嶋信雄――［編］

東京大学出版会

戦後日独関係史

2014年7月25日　初　版

［検印廃止］

編　者　工藤（くどう）　章（あきら）・田嶋信雄（たじまのぶお）

発行所　一般財団法人　東京大学出版会

代表者　渡辺　浩

153-0041 東京都目黒区駒場 4-5-29
http://www.utp.or.jp/
電話 03-6407-1069　Fax 03-6407-1991
振替 00160-6-59964

印刷所　研究社印刷株式会社

製本所　誠製本株式会社

© 2014 Akira Kudo and Nobuo Tajima, et al.
ISBN 978-4-13-026260-6　Printed in Japan

JCOPY〈㈳出版者著作権管理機構 委託出版物〉
本書の無断複写は著作権法上での例外を除き禁じられています．複写される場合は，そのつど事前に，㈳出版者著作権管理機構（電話 03-3513-6969, FAX 03-3513-6979, e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください．

「平成26年度成城大学科学研究費助成事業等間接経費による研究支援
プロジェクト」の「研究成果の公表（出版等助成）支援」を受けた。

A History of Japanese-German Relations in the Postwar Period
Akira KUDO and Nobuo TAJIMA, editors
University of Tokyo Press, 2014
ISBN978-4-13-026260-6

凡例

一、注および史料・文献リストは各章の末尾に置いた。文献の出版データ表示は、邦文の文献については、出版地が東京の場合は出版社名と出版年のみを記した。欧文の文献については出版地、出版社と出版年を表示した。

二、本書で用いられる略語については、必要に応じて各章の注の冒頭もしくは史料・文献リスト内で説明している。

三、本書で用いられる固有名詞については、原則として統一を図ったが、一部については各章執筆者の意向を優先し、あえて統一することはしなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

凡例

序　課題と視角……工藤　章　田嶋信雄　1

一　課題　1

二　視角　4

1　歴史的並行性　4　／2　比較　8　／3　関係　10　／4　構成　14

総説

総説一　政治・外交　冷戦からデタントへ　一九四九－一九七三年……田嶋信雄　25

はじめに　25

一　戦後日本＝西独関係の樹立　29

1　サンフランシスコ講和前後　29　／2　国交回復と代理大使の交換

30　／3　対中国・ソ連情報拠点としての日本　32

二　一九五〇年代の日本＝西独関係　33

1　相互交流の進展と吉田茂の「戦後版・日独防共協定」論　33　／2　大使館への昇格とアデナウアーの中国情報への関心　34　／3　クロルへの訓令案（ローゼン案）と「反ナチス」の伝統　35　／4　「慎重な観察者」と「私欲のない友人」　37／5　クロルの「将来の全面戦争」論と西ドイツ外務省の慎重論　38　／6　西ドイツおよび日本の対ソ交渉とクロルの「日独政策調整」論　40　／7　西ドイツの対ソ交渉と日本の反応　42　／8　独ソ不可侵条約の悪夢？　43　／9　情報交換の継続　44　／10　ハース大使のもとでの情報交換　45　／11　朝鮮半島情勢に関する意見交換　46

三　一九六〇年代の日本＝西独関係　47

1　アデナウアーの日本訪問（一九六〇年三月）　47　／2　分水嶺としての日米安全保障条約改定とベルリン危機　49　／3　六〇年安保後における日本外交の課題――西欧とアジア　50　／4　大平正芳の訪独（一九六二年九月）と池田勇人の訪独（一九六二年一一月）　51　／5　日本＝東独交流拡大への西ドイツの危機感　52　／6　日本政府の譲歩　54　／7　一九六四年の西独＝中国接近　55　／8　一九六四年のベルン会談　56　／9　日独外相定期協議の構想　58　／10　日独外相定期協議の開催　60　／11　事務レヴェル協議の開催と「専門家による意見交換」　61　／12　「第一回政策企画協議」（一九六九年二月）　63　／13　日本外務省内の核武装論　64　／14　経済問題に関する外務次官級協議の開催　66

四　西独＝中国関係、日本＝東独関係の正常化　67

1　西独＝中国国交樹立（一九七二年一〇月一一日）　67　／2　日本＝東独国交樹立（一九七三年五月一五日）　70

おわりに　73

総説二　経済関係　協調と対立　一九四五－一九七〇年……工藤　章　83

はじめに　83

一　貿易統制下の二国間協定と日本のガット加盟　85

1　二国間協定　一九四五年八月－一九五五年一〇月　85

1　一九四九年一〇月貿易協定　85　／2　一九五一年八月貿易支払協定　87　／3　一九五三年六月改定支払協定　88

2　日本のガット加盟――西ドイツの立場と日独間交渉　一九五五年三月－九月　89

1　西ドイツの立場――「原則的」賛成と国内産業への顧慮　89　／2　ガット関税交渉と日本の対独輸出規制をめぐる交渉　一九五五年三月－五月　93　／3　日本の対独輸出の規制をめぐる交渉の継続　一九五五年六月－九月　98

二　貿易自由化と一九六〇年貿易協定　103

1　一九五一年八月貿易協定の失効とガットにおける「ドイツ問題」　一九五五年一〇月－一九五九年七月　103

1　一九五一年八月貿易協定の失効　103　／2　ガットにおける「ドイツ問題」　105

2　一九六〇年貿易協定とガット協議　一九五九年七月－一九六〇年七月　107

1　東京交渉　一九五九年七月二二日－一一月九日　107　／2　ボン交渉　一九六〇年一月一五日－二月一二日　109　／3　西ドイツとEEC諸国・アメリカ　111　／4　再開されたボン交渉　一九六〇年四月央－五月二七日　117　／5　東京での調印　一九六〇年七月一日　120

3　一九六〇年貿易協定のその後　一九六〇年七月－一九七〇年九月　120

1　貿易協定のレヴューとガット協議　120　／2　日本・EEC通商交渉

の開始　121
おわりに　125

I　政治と外交

第一章　日本社会党とドイツ社会民主党――友党関係から忘却へ……安野正明　135
はじめに　136
一　一九五〇年代の「友党」関係　138
1　社会主義インターナショナル結成大会とシューマッハーとの邂逅　138／2　シューマッハー没後のSPDとの関係　144／3　オレンハウアーの訪日とその後　147
二　隔たりゆくSPDと社会党　154
1　ブラント訪日とその後の展開　154／2　ゴーデスベルク綱領と社会党　158
おわりに――一九六〇年代以降の関係　167
第二章　冷戦下の独日労働組合関係――安保闘争とベルリン危機のはざまで……クリスティアン・ハイデック　177
はじめに　178
一　安保闘争と第二次ベルリン危機を契機とする総評とFDGBの接近　181
1　一九五〇年代末におけるFDGBの対外活動と日本　181／2　一九

五〇年代後半の総評の闘い　183　／3　接近の基礎としての安保闘争と第二次ベルリン危機　184
二　総評を通じた日本における東ドイツの立場の強化　187
1　FDGB幹部ヴァルンケとドイブナーの日本入国問題　187　／2　影響力の極大化　191
三　東西ドイツの労働組合のはざまに立つ総評とベルリンの壁の建設　195
1　西ドイツと日本の労働組合交流の成立と東京の当局による支援　195　／2　日本におけるDGB　197　／3　壁建設の影——東西ドイツの労働組合のはざまの総評　199　／4　国際自由労連の日本認識におけるDGB　202
四　路線転換と逆流——総評の国際自由労連への接近におけるDGBの役割　205
1　両陣営に対する総評の新路線　205　／2　リヒターDGB議長の日本訪問　208
おわりに　210

第三章　気候変動問題をめぐる日独関係……マーク・ティルトン　219
——エコロジー的近代化へのリーダーシップ
はじめに　220
一　気候変動をめぐる日独関係　222
1　ドイツの気候変動問題におけるリーダーシップと日本の初期の省エネルギーへの取り組み　222　／2　気候変動をめぐるドイツの日本に対する圧力　225　／3　日独間の技術と規制措置の共有　234　／4　福島の惨事が突きつけた挑戦　238

二　日独関係の形成要因　239
1　地理的、資源的制約　240　／2　地域機構　241　／3　エコロジー的近代化　243
おわりに　245

II　経済

第四章　冷戦下の通商と安全保障……カティヤ・シュミットポット　255
——アデナウアー政権期の独日経済関係　一九四九－一九六三年
はじめに　256
一　保護主義者となった自由な世界貿易の擁護者
——一九五八年のエアハルト訪日とその失敗　260
二　冷戦下におけるパートナーとしての日本の発見
——一九六〇年のアデナウアー訪日　266
三　アデナウアーによる日本の通商上の利益のための努力　274
四　大阪マルク債　278
おわりに　284
第五章　日本・EEC貿易協定締結交渉と西ドイツの立場……工藤　章　295
——限定的自由貿易主義の限界　一九七〇－一九七一年
はじめに　296

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一　ＥＥＣ共通通商政策と日本　297
1　ＥＥＣ共通通商政策――最初の対象としての日本　297
2　ＥＥＣ側の対日交渉準備　301
二　第一回交渉――一九七〇年九月、ブリュッセル　303
1　交渉の準備　303
1　準備交渉　303　／2　ＥＥＣ側の準備　303　／3　日本側の準備　305　／4　交渉開始直前のＥＥＣ側の準備　309
2　交渉――九月一七－二四日　313
1　自由化計画およびセーフガード条項をめぐる対立――九月一七－一八日　313　／2　交渉の中断とＥＥＣ側の討議　315　／3　対立の継続――九月二二－二四日　316　／4　ＥＥＣによる交渉の総括　318
三　第二回交渉――一九七一年七月、ブリュッセル　319
1　交渉の準備　319
1　準備交渉　319　／2　ＥＥＣ側の準備　321　／3　ＥＥＣ側のさらなる準備　324
2　交渉――七月六－八日　328
1　セーフガード条項をめぐる決定的対立　328　／2　その他の議題についての「純粋に仮定的な」交渉　330　／3　ＥＥＣ側による交渉の総括　332
おわりに　333

第六章　日本と東ドイツの経済関係……工藤　章　341
——第一次石油危機後の接近　呉羽化学とツァイス
はじめに　342
一　第一次石油危機後の日本・東ドイツと呉羽化学・ツァイス　344
1　日本と東ドイツ——経済的接近　344
2　呉羽化学とツァイス——それぞれの事業と戦略　348
1　呉羽化学——製品・事業の多角化と研究開発　348　／2　ツァイス——企業改革と日本市場への関心　350
3　東ドイツにおける光学的計測機器パルモクヴァント(Parmoquant. PQ)および免疫学的癌診断法の開発　353
二　呉羽化学とツァイスの邂逅——光学的計測機器パルモクヴァントおよび免疫学的癌診断法のライセンシング　356
1　発端　357
2　契約に向けての交渉の過程　360
3　契約　362
4　設備組立て後の対立と妥協　366
1　ライセンス料の返還による解決　367　／2　パルモクヴァント3対パルモクヴァントL　370
三　パルモクヴァント2のライセンシングの帰結　373
1　ツァイスにとっての成果　373
2　呉羽化学にとっての成果　377

おわりに　378

III　社会と文化

第七章　日独の介護保険・介護政策と異文化接触……山田　誠　389
——政策官僚の行動様式と内外の関係変化

はじめに　390
一　日独の介護保険と対等な異文化接触　391
1　ドイツの二〇〇八年改革と介護保険導入の政治　391
1　改革の主要な柱と日独文化センターの会議　391　／2　介護保険導入をめぐる諸論点と責任倫理の政治　395
2　介護保険の理論的要件と日本の政治・官僚制関係　397
1　介護保険の理論と日本世論の介護関心　397　／2　政策立案プロセスと目的・手段合理性　400
二　戦後における日独の政策文化構造と高齢者福祉　404
1　西ドイツの戦後システム構築と補完性原則　404
1　ヴァイマール秩序への復帰と戦後の制度展開　404　／2　地区ミリューと自発的な慈善活動の担い手　408
2　戦後日本の政策文化価値と介護政策づくりの新局面　411
1　ベヴァリジ型理念と温情主義的パターナリズム　411　／2　介護保険の導入準備と保険者機能　414
三　連立政権下での改革実現と政策官僚の適応能力　416

1　異文化接触の三条件とドイツ社会の構造変化　416
2　政策官僚の活動環境と日本カード投入の要件　419
おわりに　423

第八章　日独科学交流――国際関係とソフトパワー……スヴェン・サーラ　432
はじめに　432
一　日独関係における科学交流　433
1　日独科学交流の過去と現在　433　／2　科学技術外交の形成　435　／3　科学技術外交の担い手　436
二　敗戦から一九七〇年代までの日独文化・科学交流　438
1　一九五〇・六〇年代の動き――民間交流と日独修好一〇〇周年　438　／2　日独科学技術協力協定の締結（一九七四年）　443
三　科学交流の強化と体系化――一九八〇－九〇年代　445
1　ベルリン日独センターの設立と政治財団の活躍　445　／2　ドイツ日本研究所の設立　446　／3　日本側の対ドイツ科学交流強化策　449
四　二一世紀初頭の新たな展開　451
1　「二一世紀における日独関係、七つの協力の柱」　451　／2　「ドイツにおける日本年」から「日本におけるドイツ年」へ　451　／3　日独科学交流のさらなる拡大、組織化・体系化　453　／4　民間財団による科学交流助成　455
おわりに――結論と展望　456

第九章　戦後日本の知識人とドイツ——「原子力の平和利用」をめぐって……加藤哲郎　井関正久　471

はじめに——第二次世界大戦後の日本の知識人における「日独関係」　472

一　ヴァイマール・ドイツを経験した知識人の戦後（その1）
——平野義太郎の場合　474

1　戦前・戦時の平野義太郎
——ドイツ留学、講座派の論客から「大アジア主義」へ　474

1　ドイツ留学から講座派の論客へ　474　／2　「民族政治」「大アジア主義」への「転向」と戦争協力　475

2　戦後——武谷三男に依拠した「原子力時代」「社会主義の核」の解説・普及　477

1　プランゲ文庫に見る「進歩的文化人」の典型　477　／2　社会科学者として「原子力の平和利用」を提唱　478　／3　武谷三男に依拠した「社会主義でこそ原子力の平和利用」　480

3　「現存社会主義＝平和勢力」論と東ドイツとの交流　481

1　「全般的危機」論に導かれた「社会主義の防衛的核」　481　／2　日本平和委員会会長として東独と交流し「原子力の夢」を追い続ける　483

二　ヴァイマール・ドイツを経験した知識人の戦後（その2）
——有澤廣巳の場合　485

1　人民戦線事件から秋丸機関抗戦力調査、戦後経済再建ブレーンへ　485

1　労農派アナリストとして「支離滅裂の秋丸機関」に関わる　485　／2　ヴァイマール・ドイツの教訓としての「日本経済の自立」　486

2　日本経済自立のために——エネルギー転換と原子力委員就任　488

1　原子力委員会の「労働代表」委員に　488　／2　石炭・石油後の原子力によるエネルギー安定供給　489

3　ヴァイマール・ドイツの教訓——原子力の経済性と安全性のはざまで　490
1　社会党・総評と決裂して反原発運動の標的に　490　／2　ヴァイマール共和国から得た歴史的教訓　492
三　戦後派知識人にとっての「ドイツから学ぶ」——高木仁三郎の場合　493
1　「市民科学者」高木仁三郎の「ドイツ反核運動から学ぶ」　493
2　「市民科学者」への目覚めと行動の開始　495
1　活動の原点　495　／2　ハイデルベルクでの研究生活における(西)ドイツ体験　497　／3　西ドイツ反原発運動からの刺激と原子力資料情報室の立ち上げ　499
3　東西ドイツ市民運動からの新たな刺激と「市民科学者」間の国際連携　502
1　西ドイツにおける運動の広がりと組織化　502　／2　チェルノブイリ原発事故後の欧州訪問　503　／3　西ドイツの対抗専門機関からの刺激——ミヒャエル・ザイラーとの交流　505　／4　東ドイツ「平和革命」からの刺激——セバスティアン・プフルークバイルとの交流　509
おわりに——高木仁三郎にとって「ドイツから学ぶ」とは　512
あとがき　523
人名索引・事項索引
執筆者・翻訳者紹介

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com